O C U A C

大阪市立大学山岳会会報　No.54　　2012.6.25

上の写真

サルバチョメＣ２付近から見た上部アイスファール帯と頂上手前のドーム

左横の写真

サルバチョメアイスファール帯最後の氷壁。ここが越えられなかった。

目　次

追悼　廣谷元会長への弔辞　　１～２　北濃　祥二

前会長廣谷光一郎氏は 20 年に及ぶ食道癌と手術後の後遺症との戦いを続けられておられましたが、遂に去る 6 月 10 日に逝去されました。6 月 14 日の通夜の席で北濃さんに追悼文の御執筆をお願いし、今号に掲載するものです。

ランタン紀行 2012(サルバチョメ報告)　　３～９　和田　城志

カンチェンジュンガトレッキング報告　　10～13　佐々木　惣四郎　他３名

静かなる山旅　　14～15　苑樹　慶子

マナスルトレッキング報告　　16～21　福山　昇二

夏（6 月）の富士山　　22～23　片岡　泰彦

総会が開催されました　　24

小笹新会長挨拶　　25～26　小笹　孝

大阪市大山岳会新役員人事　　27

24 年度総会案内返信欄より　　28～29

活動報告、会計報告（山岳会及び雪線）　　30

雪線関係報告　　31

書籍の寄贈について　　32　　奥田　寛

＊写真提供　表紙　廣谷元会長写真　　兵頭　渉
表紙裏　サルバチョメ写真　　和田　城志
裏表紙　ドルジェラクパ写真　　和田　城志

広谷さん、さようなら、お世話になりました

北濃祥二

市大山岳会の会員であれば、山岳会前会長広谷光一郎先輩の思い出は、各自いろいろあることと思います。氏の広範囲なご活躍とご交友は、去る３月に発行された『創立９０年抄史』雪線の記録を読んで頂ければ、そのときどきの燦然としたご活躍を辿ることが出来ます。

ここでは、私が広谷さんから受けたご指導とその思い出を、順不同にトレースしたいと思います。

広谷さんとの最初の出会いは、１９５８年４月（昭和２９年)、穂高岳新人歓迎合宿に参加したときでした。市大に入学したばかりの私は、個人装備は何も持っていませんでしたが、広谷さんがピッケル、ナーゲルを調達してくれました。お陰で、新入部員として、歓迎合宿に参加することができました。同期の新人は、『雪線』第１９号を見ると、藤本、南、清原、岩橋、岡本の諸氏でした。

借り物の靴がピッタリだったので、私は調子が良く、新入部員としてはただ一人、奥穂頂上直下に張った青色のビニールテントで一夜を過ごすことができました。テントの中で、広谷さんから山のよもやま話を聞いたように思います。多分、将来のヒマラヤ遠征の話だったかも…。

その年の夏山は、穂高の奥又合宿でした。このときは、前穂３峰唐沢側フェースを登るべく北尾根に取り付く雪渓で私はスリップをして、広谷さんと堺さんに助けてもらいました。３峰の壁を登る前に、広谷さんは、岩登りは、できるだけ岩から体を離し、手と足は同時に動かすのでなく、ひとつづつ動かす。所謂「三点確保」を教えてくれました。また、岩登りは、手に頼らず、足でしっかり登れと繰り返し言っておられました。お陰で、スリップすることなく、三峰のピークまで登れました。

このとき教えてもらった“三点確保の原則”は、卒業後も仕事のいろんな場面で応用でき、着実に物事を進める手立てとして活用できました。雪渓でのスリップの直後だっただけに、この教えは、私の脳裏に焼きこまれました。今は、岩登りはできなくなりましたが、駅の階段の上り下りにこの原則を役立てています。

市大山岳会の皆さんのなかでも、現役の広谷さんから、登山技術を直接教えていただいた部員は、我々の年次まででした。

次に、時代はとび、２００３年(平成１５年)５月私がJICAシニア海外ボランティアとして、ネパール観光局に赴任していた時、広谷さんは、橋本さんご夫妻、川勝さん、大島健司さんのお姉さんのランタン・リルン墓参団チームのリーダーとして、カトマンヅに来られました。

私も墓参に同行したかったのですが、当時のネパールは、王制反対運動を起こしていたネパール共産党毛沢東派、通称マオイストが、リルン谷入り口の部落を占拠していた時代でした。

私は、墓参団は、ヘリコプターで、ランタン部落まで飛ぶので、問題ないでしょうと、JICA事務所に休暇願いを出したのですが、却下されご一緒できませんでした。無事墓参が終了後、カトマンヅの街をご案内して、ヒマラヤ蕎麦などをホテルで召し上がっていただきました。このとき、広谷さんから、１９６１年ランタン・リルン第一次隊のカトマンヅの基地だったボード・ラナ氏に記念品を手渡して欲しいと頼まれました。広谷さんは、お世話になった人たちに対する配慮を忘れない人だと思います。
当時、ボード・ラナは、昔の邸宅からどこかへ転居しており、なかなか見つかりませんでしたが、やっと、手渡せました。ラナ氏は、昔を懐かしみ、大変喜んでいたと記念品を託した人から聞きました。
ネパールから帰国後の２００５年（平成１７年）３月、広谷さんから、中国雲南省のミニヤ・コンガの氷河を見物にいかないかとお誘いを受けました。当時の私は、左ひざが痛く力強く歩けなかったのですが、橋本さん、奥田寛さんが同行とのことで、ご一緒させていただきました。また、治療用にと、膝の痛みに効く自社製の“ジョイント・パワー”というクスリを頂きました。
当時広谷さんは、既に胃の手術をされており、食事は、少しづつ召し上がっておられたのですが、広谷さん独特の健康法を実践しておられました。それは、スコッチウイスキー(シーバス・リーガル)を、毎日、ストレートで飲み、カロリーの補給には丁度良いのだと、楽しんでおられました。私は、ただ驚くのみでした。このカロリー補給は、２００５年も、２０１０年のリルン遭難５０回忌のときにも実践しておられました。
医学博士として、ヘルス・コンサルタントとして、食生活改善、普及活動に活躍され、更に、(株)ホワイズの社長・会長として、永年の研究を踏まえて、ご自分の健康管理に努力しておられました。私は、日本橋の会社の応接室で、それらのお話をしばしば伺いました。
そのお話のひとつに『ガンを肴に―そしてガンに克つ食材』という本を頂戴しました。平成１０年の頃でした。この本では、ガンについての基礎知識や、日常生活の中で、いかにガンを予防するかが判りやすく記されています。
葬儀の折、ご子息の岳之からご挨拶の中で、広谷さんが、過去２０年間、いろいろ病と闘っておられたと伺いましたが、その時々の病に対して、ドクターとして広谷さんは、いつも病を冷静に正面から受け止め、闘っておられました。
ついに今回は、病からのご生還はなりませんでしたが、今頃は、ランタン・リルンの頂上で、泉先輩、森本隊長、大島健司さんらと、おいしい酒を酌み交わしておられることでしょう。また、１９７０年の日本山岳会エベレスト登山隊に医師として参加された広谷さんは、二度登られたサウス・コルで、親友だった植村さんら物故者と、静かだったエベレストを回想しておられることでしょう。
では、思い出はつきませんが、広谷光一郎先輩、いろいろお世話になり、有難うございました。どうぞ安らかにお休み下さい。

合掌

ランタン紀行 2012 年(サルバチョメ報告)

和田　城志

はじめに

ランタン・プロジェクトの一環として行われたサルバチョメ登山は失敗した。私はどこでもいいからヒマラヤの頂上に立ちたかった。しかし、そう簡単には登れない。長いブランクがあったし、日本の山もろくに登っていなかったから、正直自信はなかった。とにかく歩くと担ぐは心がけようと思っていた。それは今私がやっている旅の延長線上にあった。

ヒマラヤの山に登っても何ほどのことでもないことはもう分りきったことで、かつてのような情熱がうすれているのも事実だ。何がなんでもという執着心もないような気もする。体力も気力もまちがいなく衰えてきている。それでもこの旅は大きな収穫をもたらしてくれた。

一つは登山技術や山の中での判断力は衰えていないこと、もう一つは高所順応に対する適性がまだあることだった。シェルパたちにほめられた。8000m峰も十分に登れると言われた。そう言われると、情熱やら執着心やら気力やらが甦ってくるような気になるからおかしいものだ。

シェルパたちのクライミングテクニックや圧倒的なボッカ力を見せ付けられると、登山家の見栄もなくなって、ひたすら頼ってしまう。そしてそれが当たり前になって、悔しさや情けなさを感じなくなる。そうなるとヒマラヤ登山以前の問題で、登山者としての価値もなくなる。そういうことに逆らいたい。なぜ山に登るのか、素朴な疑問がまた湧いてくる。

私はこの山旅の間、ずっとそれを考えていた。彼らに張り合って勝てることは、完全にない。しかし、彼らに近づこうとすることはできる。その一つの方法として、自分でできる最大限のことをする。勝ち負けということではなく、懸命に歩き、懸命に担ぐ。そして、常にフロントにいることを心がける。ルート工作の先端に、キャンプ建設の先頭にいる。出来る限りの荷上げをする。

つまり、それら全部が登山だからだ。頂上に立つことだけが登山でないことは誰でも知っている。結果は二番目に大切なことで、一番大切なことは過程、いかにして登ったかということだ。登山の真の喜びは、すべてを終えて日常の生活に戻った、何気ない夕暮れに突然やってくる。しみじみと湧き出てくる感動は永遠だ。年月を経ても褪せることがない。その登山にいかにして係わったか、どのように行動したのか、それが感動の源であって、けっして頂上の風景ではない。

私はたくさんの頂上に立ったが、思い出すのはそこではない。危険や困難に立ち向かったときの刹那が甦ってくる。きわどいクライミングやラッセルに苦しめられたこと、長い雪洞での沈殿、とりわけ遭難の記憶を生々しく思い出す。

今回の山旅は、それらをもう一度確認する旅であったと言えるだろう。ランタン・プロジェクトはすばらしいチャンスを与えてくれた。旅の日程を簡単に示して、旅を振り返ってみよう。

活動報告

4 月23日　中国南方航空で予定通り深夜のカトマンズに降り立つ。関西空港14:00出発でその日の内に着くのだから便利になったものだ。伴さんとは広州空港で合流する。

24日　午前中、伴さんは観光省へ、私は買出しへ。午後セブンサミットのオフィスへ行き、シェルパたちと対面する。代表のミンマ(33 歳)はシェルパで初めて8000m峰14座を完登しただけあって、自信にあふれた青年だった。流暢な日本語、やわらかい物腰、大物の風格がある。ダワ(52歳)8000m峰を20回も登頂している猛者だ。ヌルブ(25歳)ダージリンの登山学校に籍を置き、インドヒマラヤの山を数多く登っている。チェテン(35 歳)トレッキングガイド、登山キャリアはほとんど

ないが、英語が書ける。期待できる顔ぶれだ。リエゾンオフィサーはリシ・ラム・バタライ（42歳）、気さくな観光省の役人だ。キャンジン・ゴンパまで同行することになった。

25日　晴れ　大型バスでシャブルベシ（1500m）へ。

ローカルポーター5人を加え、合計11人で出発、大型バスは荷物、人ともにゆったりだった。ドンチェ前後は路肩が崩れて、危ない道が続く。伴さんの話では、去年の秋はドンチェから歩いたと言う。ネパールの山岳道路は崩壊と補修の繰り返しだ。

26日　晴れ　ラマホテル(2420m)へキャラバン開始。

さすがにトレッキング入門コースだ。多くのトレッカーが行き交うし、一時間おきに茶店がある。道も立派で歩きやすい。韓国人の大パーティ 43 人が下ってきた。一人が高山病で転び骨折したとかでポニーに乗って下ってきた。

27日　晴れのち雨　ランタン村（3470m）へ。

ランタン・リルンの雄姿が谷をふさぐように聳える。とても登れそうに見えない。村に着く前から雨がポツリポツリ降ってきた。山は雲に隠れた。レリーフに詣でる。50 年か、長い歳月を思う。今回の登山の成功と無事を祈った。

28日　晴れのち小雪　キャンジン・ゴンパ（3800m）へ。

同宿したオーストラリアの女子医学生に写真を撮られた。ランタン谷にきてリルンの初登頂者に会えば記念にはなる。他でも二度撮られた。ノンストップで歩き、2時間ほどでキャンジンに着いた。

29日　晴れのち曇り　BC偵察。

ヌルブと二人でリルン氷河の右サイドモレーンをつめ、BC地偵察に出かける。キムシュン氷河のアイスフォールの下の平原から雪の支尾根を登るが、急で滑って登りにくい。沢を横切って、ヤンサ・テンジ側のサイドモレーンに移る。そこにはカルカがあり、石造りの小屋があった。ここをBCにする。下りはこのサイドモレーンを忠実に下った。立派な踏み跡があった。

伴さん、ダワはキャンジンでデポ品の回収と整理をする。

30日　晴れ一時小雪　BC(4500m)建設。

私とヌルブとチェテンはBC入り、伴、ダワ、カルマ（ポーターだった彼をBC雑用係に雇う）、キャンジンポーター2 人は荷揚げと順応。天気は午後になると小雪が降ったり、雲が湧いてきたりするが、夜には星空になる。リルン氷河を隔てて、ランタン・リルンの巨大な雄姿が眼前に広がる。この角度から見るリルンは初めてだ。本当に大きい。氷河が後退して以来、もう氷河ルートには取り付けないし、東南稜にも巨大なクレバスと氷崖があり、登れない山になってしまった。

5月1日　晴れ一時小雪　C1偵察。

サイドモレーンの尾根を小一時間登ると、ヤラ・ピークに続く広い斜面が一望できる。足元の盆地には小さな池があり、小川が流れている。1959年の飯田山岳会のC1(5000m)の位置だ。この斜面をヤンサ・テンジン側に沿って登ってゆくと、アイスフォールで行き止まる。雪崩の危険のない雪の丘にC1を定めた。ヌルブとチェテンは、偵察だと言ったのに、大量の装備を担いできた。

ルートははっきりしていて問題ない。予定通り全員BCに終結する。

2日　晴れ　私は休養、伴、シェルパ3人はC1へ荷揚げと順応。

一人BCでリルンを眺めた。この山に今も森本さん、大島さん、ギャルツェン・ノルブさんが眠っている。この山との縁(えにし)をどのように考えればいいのだろうか。

死者の山で
思い出されたときに
死者は再び生きる、この山で
氷の宮殿の奥深く
ブルーシルクの衣をまとい
友人たちの声を聴いている
そこには永遠の幸いが眠る
悲しみが若さを甦らせ
慰めが未来を淡く染める
思い出されたときに
死者はこの歳月を讃える
氷の空を自由に飛び舞う翼で
私が、この山に聞く声
私が、この山に見る姿
思い出されたときに
それらは、人生の宝になる

３日　晴れのち雪　C1（5300m）建設。

粉が吹いたように新雪が積もっているが、日中の陽射しですべて融ける。リルンに見送られてC1に向う。ヌルブとチェテンは満載のザックだが、私は個人装備だけ。それでも彼らについてゆくだけで精一杯だ。尾根筋から盆地へ回り込み、雪と岩のまばらな斜面をヤンサ・テンジン側に沿って登る。テントサイトは万全のところに建設した。午後から雪が本格的に降ってきたが、やはり夕方には止んだ。

４日　晴れのち小雪　C2予定地から上部アイスフォール下まで偵察。

期待を胸に下部アイスフォール帯に入る。クレバスのため、ヤンサ・テンジの岩壁基部の方に追いやられたが、簡単に上の雪原に出られた。そこには一面に氷塊が散乱していて、ヤンサ・テンジからの氷雪崩が頻発することを示していた。ヤラ・ピークにつながる稜線の方へ大きくトラバースし、中部アイスフォール帯は簡単に迂回できた。その上は広大な雪原となっていて、東の方へ流れ落ちている。それがサルバチョメ氷河に落ちるアイスフォールだ。この広い雪田の雪は、南側と東側へ流れていることになる。奇妙な地形だ。

雪原いっぱいに巨大な上部アイスフォール帯が横切っていて、ルートが分らない。雪原の中ほどをC2と決め、荷物をデポしてC1へ下る。伴さん、ダワがC1入りしてきた。

５日　小雪　沈殿日。

朝から雪が降った。テントを打つかすかな音、霧雨のような雪だ。雲は 6000mより上にあり、下界は視界が開けている。風もなく静かな一日だった。ナヤカンガとガンジェ・ラが正面に見える。

６日　晴れのち小雪　C2建設後上部アイスフォールにルート工作。

５人全員でC2に向う。テント設営を伴、ダワに任せて、我々は上部アイスフォールにルート工作に向う。中央部にルートを求めた。短い氷壁を二箇所越え、クレバスを左右に迂回して、最後の氷壁が見えるところまで登った。250mフィックスをした。少しオーバーワークになってC2に戻った。伴、ダワが広い雪原をC1に下って行くのが見えた。

7日　晴れのち小雪　ルート工作失敗。

飯田山岳会はこの上部アイスフォールの上に最終キャンプを設け、アタックしている。我々もそうすることにした。最後のバームクーヘン状氷壁帯さえ突破できれば、後はなだらかな斜面から稜線に出られる。彼らの記録ではアタックは容易で、登頂後その日のうちにC2まで下っている。頂上が射程に入って、何だかあっけない登山だと思ったが、そうは問屋が卸さない。

C3の荷物と3日分の食糧を持ち、C3建設に向う。翌日、そのままアタックに向うことにした。しかし、最後の氷壁は手強かった。昨日の到達点から小さな氷壁を越え、クレバスを迂回して最後の氷壁基部に立ったが、10mほどのハングした氷壁が越えられない。右に左にルートを探ったが弱点が見当たらない。今日のC3建設は断念、いやルートの見通しも立たない。仕方なくフィックスを回収しながら、せっかく担ぎ上げた荷物を持ってC2に下った。

フラフラになってC2に降り立った。すでに伴さん、ダワは着いていた。明日からの行動をどうするか話し合った。シェルパたちは口数少なく、ヌルブがアイスフォール帯の右端の稜線はどうかと言う。私は反対にヤンサ・テンジ側の壁下から上部雪田に出られないかと言った。中央部は最後のバームクーヘン状の氷壁が途切れなく続いており、梯子がない限り突破は無理だった。

ダワと二人で雪田を少し下り、右の尾根を偵察したが、このルートは、クレバスとハンギング氷壁が連続していてまったく無理だった。明日、私の選んだルートを試み、これがダメならこの面からの登頂は無理だということになる。

8日　晴れ　突破できず、登山中止。

ダワも参加して4人でルート偵察に出る。巨大なクレバス帯に沿って、大きく左にトラバースする。ヌルブは大きく迂回してクレバスを越えたが、ダワは直接越えられそうだとショートカットした。私は危険だと止めたが、彼は強引に横切った。仕方なく私も慎重に後に続いた。しかし、ラストのチェテンが踏み抜いてしまう。ロープに力がかかった。振り向けば、チェテンが視界から消えていた。

急いで、ピッケルを埋め、プルージックで固定した。ヌルブがクレバスに近づこうとしたので、怒鳴った。彼らはこういうときの技術が杜撰だ。すぐにメインロープを出させ、ダワに確保させてヌルブを崩れたクレバスに近づかせた。クレバスは下広がりで巨大な闇の中に、彼は宙ぶらりんになっていた。ザイルを降ろし、ハーネスに固定させ、三人で力まかせに引き上げた。アンザイレンしたロープが切れなくてよかった。もし切れていたら、遺体の収容もできなかっただろう。

引き上げられたチェテンは顔面蒼白で激しく呼吸した。シェルパ三人は私の顔を見る。どうするのか、と言うように。当然前進だ。慎重に行こうと先を急ぐ。岩壁に沿ってクーロアールを直上する。ヤンサ・テンジへの稜線直下にアイスビルディングがあり、今にも崩れそうだ。クーロアール内は逃げ場がない。

やっと安全な雪稜上に出たが、あの最後の氷壁は途切れることなく、ヤンサ・テンジの壁まで続いており、なおかつその下には巨大なクレバス帯が横切っていて、取り付くこともできない。もう、なすすべはない。登山の中止を決めた。ダワは申し訳なさそうに、仕方がないという顔をする。

フィックスを回収しながら慎重に下りC2に戻る。懸垂下降の始点にスノーバーとフィックスを4本残置した。「伴さん、登れませんわ。やりようがない。梯子が二台ほどあれば、わけないのに」と報告する。

この日のうちにC2を撤収、C1に下った。ノルブとチェテンは疲れも見せず、そのままBCまで下っていった。

9日　晴れ　BCへ下る。

昨夜、雪崩の轟音で目を覚ました。ヤンサ・テンジからの氷雪崩だった。BCへの下りルートに氷のデブリが散乱していた。チェテンとヌルブがC1撤収のため、早くも登ってきた。ほんとうにシェルパは元気だ。彼らに撤収を任せ、先に下る。BCにはヤクが登ってきて草を食んでいた。わずかの間だったが夏が近いと感じた。

10日　雨　BCを撤収してキャンジン・ゴンパへ下る。

ゲストハウスの主人ネルップ、妻ヤジン、出稼ぎの少女ドルマが笑顔で迎えてくれた。雨が止まないので、午後の作業はやめて、酒びたりの一日になった。伴さんがサラミなどの日本食を放出してくれて、ビールやロキシーで無事を祝った。

明日からの計画を話し合った。伴さん、チェテンは5日間の予定で、ドルジェ・ラクパBCを往復する。私とダワとヌルブとカルマはランタン氷河を遡り、ハーゲンのコルに登り、引き返して、ティルマン・パスを越えてカトマンズに向う。合計で15日間の山旅だ。

11日　晴れ　伴さん、チェテンは出発。

我々は準備と休養、それに装備の整理のためもう一日キャンジンに泊まる。伴さんから、今日は森本さんたちの命日だと聞かされる。51年前の今日、あの遭難が発生した。伴さんを見送った後、ロキシーを飲みながら思った。山岳会員のそれぞれの胸中にそれぞれのランタン・リルンが聳えている。それは感傷ではなく、それぞれ一回きりの人生の抜き差しならぬ宿命だ。ランタン・プロジェクトもその延長線上にあるのだろうか。今ここにいることにしみじみ幸せを感じた。

すする
ヤジンがすする
ネルップがすする
ドルマがすする
わたしがすする
薪のはぜる音
熱い茶のぬくもり
ヒマラヤの朝は一杯の茶から始まる
少しずつ音が増え
少しずつ一日が目覚める
ヒマラヤの空には、
もう黄金のランタン・リルンが輝いている
51年前の今日、あなたたちは静止した、
一服の茶をすすることなく
だからわたしたちは、
あなたたちの一日を受け継いでゆく

12日　晴れのち小雪　ランタン氷河遡上に出発。ランシサ・カルカからキジュンプ・キャンプ(4360m)へ。ティルマン・パスを越えてきた国際隊に出会う。ネパール縦断中だと言っていた。

13日　快晴　モリモトBCよりキュンカ氷河出合手前の氷河キャンプ(4800m)へ。

14日　快晴のち小雪　ランタン氷河源頭、ハーゲンのコル下のキャンプ地(5300m)へ。

15日　晴れのち小雪　ハーゲンのコル上(6150m)往復する。コル直下は急な氷壁で緊張した。

氷河が後退して稜線直下は壁になっており、ザイルを使った。コルから東側は広々としたニャナン氷河が広がる。その奥をシシャ・パンマ(8027m)南西壁が塞ぐように聳えている。

16日　晴れのち小雪　氷河キャンプを越え、右岸サイドモレーンのキャンプへ。

17日　快晴　一気にキャンジン・ゴンパへ下る。

18日　晴れ　キャンジン・ゴンパで休養。帰路トレッキング用の食糧、装備の準備をする。

19日　晴れ　ランシサ・カルカからランタン谷を横切り、対岸でキャンプする。

20日　晴れ　ランシサ氷河右岸サイドモレーンを登り、氷河を横断し、ティルマン・パス直下の池のそばでキャンプ（4800m）する。氷河が荒れていて、横断するところではかなり苦労した。

21日　晴れ　ティルマン・パス(5400m)を越える。ランシサ側は問題のない雪の斜面だが、南面は急な雪面になっていて、ポーターのためにザイルがいる。左岸サイドモレーンを下り、氷河末端を横切って右岸の道に出る。最初のカルカ、ティンクンテ(4300m)でキャンプする。ドルジェ・ラクパを南面から遠望する。

22日　曇りのち雨　観光地でもあり、寺院のあるパンチ・ポカリ(4074m)まで下る。村はなく、カルカが点在する。よく歩いた一日だった。ヤルツァグンバ（冬虫夏草）採取の人々が多く山に登ってきていた。雨季の始まる二ヶ月が採取期間だ。

23日　晴れのち曇り　稜線の道から谷沿いの道へ、ボタン(1800m)へ。ここからは車道歩き。一番よく歩いた一日だった。高度を一気に下げた。

24日　曇り　バスでメランチ(870m)へ。二年前ガンジャ・ラを越えて、このメランチで泊まったとき、すてきな少女と出会った。その子に再会するため、ダワと一泊する。ヌルブとカルマはそのままバスでカトマンズまで行った。

25日　曇り　カトマンズへ。チベット・ゲスト・ハウスに投宿する。

26日　曇り　航空券を予約する。セブンサミットへ荷物をデポする。

27日　曇り　シェルパたちとお別れパーティをする。彼らの家族も集まる。

28日　曇り　コスモトレックに行き、大津さんに挨拶をする。ペンバ・ツエリンと再会する。深夜、中国南方航空便でネパールを発つ。

おわりに

サルバチョメ以後の山旅は簡単に日程だけを書いた。詳細は自閉日詩で披露しようと思う。

帰国して、『雪線、創立九十年史』のページをめくった。泉さんは随筆『山岳部長の頃のことども』の中で、山岳部長山根徳太郎先生について感謝の気持を述べている。その背景には、1933年の剱岳と 1961 年のランタン・リルンの二つの遭難がある。泉さんの人生の中で、この二つの遭難がどれほど重要な出来事であったかをよく伝えている。泉さんは、アルピニズムを標榜する山岳部の（登山部ではなく）創立者と言っていいだろう。クライマーでもあった彼は、遭難とも縁が深い。それも自分が遭難するのではなく、遭難の後仕舞いをする役割を担ってきた。面倒見がいいのだろう。頼れる兄貴分でもあったのだろう。1942 年の入江さんらによる台湾、大覇尖山から新高山までの縦走登山の遭難騒ぎでも現地に飛んで後仕舞いをしている。ランタン・リルン遭難の事後処理は彼なくしてはできなかったかもしれない。

森本さんがシベリア抑留から帰国したのは 1949 年であり、ティルマンが初めてランタン氷河に足を踏み入れた年である。ちなみに私の生まれた年でもある。森本さんは戦前の旧制大阪商大山岳部黄金期とも言える時代に行った主要な登山に参加している。1939 年の積雪期黒部初横断、

1940 年の鴨緑江源流、1941 年の剱岳北方稜線毛勝山などである。それに加え、部報に多くの研究論文を載せている。「中央アジア探検史要」や「研究−遠征、食糧、パッキング−」など学究肌の人のように感じる。

彼は、当時部で論争のあった「遠征主義」か「バリエーション主義」かに分類すれば、多分前者であったように思う。大橋秀一郎の「未知を求める探検」と入江康行の「困難を求めるアルピニズム」は現在でも形を変えて戦わせる議論だ。彼がランタン・リルンに求めたものは何であったろうか。我々は今、ランタン・プロジェクトに何を求めているのだろうか。

故広谷前会長の記した『創立九十年抄史発刊に当って』の最後に、「さて、今秋からランタン・プロジェクトが開始され、ランタン谷の長期にわたる組織的解明が試みられる。十年後にはその成果をその他での山の活動と共に振り返りたい」と結んでいる。1961 年の遭難で九死に一生を得た人生を今年閉じた。魂の実在を認めるなら、彼はリルン氷河に戻っていったではなかろうか。泉さん、森本さん、広谷さん、ランタン・リルンに係わった人々は彼岸に旅立った。そこで彼らは何を語っているのだろう。

短い山旅であったが、先輩たちの足跡を見つめなおす旅にもなった。みんなその時代時代に憧れを持って山に向ってきた。戦争で斃れた人もいる。ヒマラヤで眠る人もいる。老いと戦う人もいる。青春を諦めた人もいる。青春を卒業できない人もいる。人は常にあこがれとあきらめのあいだで生きている。実現できない夢を見るのは子供、実現できる夢を見るのが大人、と言うではないか。ランタン・プロジェクトを子供の夢で終わらしたくはない。

Pemthang Karpo Ri (6865m)

シシャパンマ

Rangtang Ri (7205m)

メランチの少女

カンチェンジュンガ・トレッキング報告(2012/04/20～05/20)

：　　佐々木惣四郎、佐々木春子、苑樹慶子、福山昇二

4 月 20 日　CA164(中国国際航空)で関空発、上海乗換で成都着(成都のモーテル(ホテル)泊)

4 月 21 日　CA407 で成都発、ラサで給油・出国手続きしカトマンズ着。ヒマラヤ越えでジャヌー、カンチェンジュンガ、エベレストが見える。チベット GH 泊。

4 月 22 日　トレッキング許可証待ちでカトマンズ滞在。

4 月 23 日　10:10 KT 発 10:10、10:50 BHADRAPUR(バドラプール)着。車で TAPLEJUNG(タプレジュン、1,820m)に 19:45 着。機内からガウリサンカール、エベレスト、カンチェンジュンガなどが見えた。タプレジュンまでの道は 6 年前に佐々木さん経験した悪路は舗装されていたが、それでも 8 時間強の乗車。タプレジュンの GH 泊。

4 月 24 日　11:20 GH 発～15:20Mitlung(ミトルング、921m)。午前中、ポーター手配、食料調達。Tamor Nadi(タモル谷)に向けて下る。村の民宿に泊。
ポーター11 人、キッチン 3 人、コック 1 人、シェルパ 2 人と我々4 人の総勢 21 名。

4 月 25 日　出発 8:10～(昼食タイム 1:45)～15:45Chiruwa(チルワ、1,270m)。谷に沿って歩く。村道で歩きやすい。暑い。雨模様なのでロッジ泊。

4 月 26 日　出発 7:45～(昼食タイム 1:25)～14:30 Sukathum(スカトム、1,576m)。
谷沿いに歩き 3 時間程で高台に上がり昼食。Hellok の村を対岸に見る一軒屋のテントサイトでテント泊(草地で快適)。ここで初めてスイスからのトレッカーと出合う。

4 月 27 日　出発 7:40～(昼食タイム 1:50)～14:30 Amjilosa(アムジロサ、2,309m)。
吊橋を 2 つ渡る。道は地図とことなり谷沿いに右岸を歩く。昼食後、谷からどんどん上がる。到着後、大雨となりバッティー(4 人部屋)に泊まる。

4 月 28 日　出発 7:45～(昼食タイム 1:45)～14:10 Gyabla(ガブラ、2,730m)。
歩きだして 1 時間程で右手、谷奥に白い山が見える。展望の良い丘陵地帯のテントサイト。しゃくなげの花が見られる。今までの村はインド文化圏の感じだったが、この辺りからチベット民族らしい村となる。

4 月 29 日　出発 7:45～(昼食タイム 1:20)～14:50 Ghunsa(グンサ、3,400m)。
気温 10℃(6:00)。晴れのち雨。
シャクナゲの咲く谷沿いの道を進み、最奥の大きな村・グンサに到着。ひらけた所で何軒もロッジある。その中でも新しいロッジの所有者で村の有力者らしいチベット人の敷地がテントサイト。衛星電話があった。テントサイトから 6 千 m 級の山が見える。

4 月 30 日　高度順応日。気温 0℃(6:00)。晴れのち小雨。

5 月 1 日　出発 8:10～(昼食タイム 1:00)～15:30 Khangpachen(カンバチェン、4,050m)。
気温　－2℃(5:30)。晴れ。
歩きだして 2 時間過ぎで正面左奥に Sarphu(シャルプ、6,000m 級)の三山が見える。テントサイト手前のトラバース道から待望のジャヌー(Jannu、7,711m)がガスの切れ間から姿を現す。感動。ガスの切れ間を待って写真撮影。

感動のジャヌー(7,711m)

5/3 夕方　降雪のパンペマ(5,143m)

5 月 2 日　出発 7:50～(昼食タイム 1:15)～14:50 Lhonak(ロナック、4,780m)。
気温－5℃(6:00)。晴れ。

5 時前に起床し、来た道の丘に写真撮影に出かける。ジャヌーの左にカンバチャン、奥に 8 千 m のヤルンカン、カンチェンジュンガが見える。

この辺りから高度の影響で息苦しい。平気なのは佐々木さんだけ。

5 月 3 日　出発 7:35～12:00 Pangpema(パンペマ、5,143m)。気温－9℃(5:00)。晴れのち雪。

カンチェンジュンガ氷河右岸のモレーン台地を歩く。3 時過ぎから雪となり、直ぐに辺り一面真っ白になる。

5 月 4 日　出発 10:00～13:45 ロナック。気温－10℃(6:00)。雪のち晴れのち夕方から小雪。

今日は近くの Domo Ri(ドーモリ、6,050m)に登る予定であったが、昨夜からの降雪が早朝まで続き出発時間が遅れたこと、高度順応が充分でないことから断念する。陽が昇り、降雪が止み、晴天となると気温がぐんぐん上がる。テント外のテーブルで雪山を見ながら朝食。テントサイト左から 7 千 m 級のネパールピーク・ギャップ・ツウィンズ、カンチェンジュンガ氷河の奥に 8 千 m 級のカンチェンジュンガ I 峰・中央峰(一番大きく見える)・ヤルンカン、真近くにウェッジ・ピーク゛(6,802m)が迫る。別天地だ。一面の雪の中(10～15cm)、高度を下げるためロナックへ。夕方から降雪。

カンチェンジュンガを背景に

カンチェンジュンガ(8,586m)

5 月 5 日　出発 7:50～12:00 カンバチェン着。晴れ(山々はガス)。気温－4℃(5:30)。

昨日の雪道でサングラスのないポーター数名が雪盲になる。出発から 2 時間程は雪道。高度が 1,000m 下がり、体調は万全。夕方から湿った降雪。

5 月 6 日　出発 7:15～12:40 グンサ着。気温－2℃(5:30)。晴れ。

夕方からの湿雪がテントを重たくしていた。下山道のガラ場のトラバースが落石の危険地帯となる(雪解けで岩がゆるむ)とのことで少し早めに出発する。シェルパの誘導で無事通過。グンサが近づくに連れ、雪融け道から顔を出す黄色い花がきれいであった。今日の食後にはトレッキング前半完了を祝い、ケーキが出た。

5 月 7 日　出発 8:10～13:00(ランチタイム・弁当)13:15～14:15Sele La(セレ峠、4,290m)。
気温 2℃(6:00)。晴れ。

グンサの村から尾根に取付く。主稜線にでて 1 時間ほどで雪道となる。尾根の右側をトラバースぎみに高度を稼ぐ。今日の宿泊は避難小屋と言う感じの石積みの小屋。湿った雪で靴が濡れる(峠近くで積雪は 10～15cm)。

5 月 8 日　出発 6:40～9:10 Mirgin La(ミルギン峠、4,480m)～11:20 Sinelapche Bhanjyang(ラプサング峠、4,646m)～15:50 Cheram(チェラム、3,870m)。気温－5℃(5:00)。晴れ。

昨夜はマット 4 枚で一杯の部屋の 4 人で寝た。小屋(峠)前からマカルー・ローツェ・エベレストが遠望できる。早朝の間は雪が固く、歩きやすい。ミルギン峠の登りでジャヌーの南面が見える。絵になる山やなぁー。この峠から下りになるかと思えば 2 時間以上もトラパース(右側)の登り下りを繰り返し、やっと最後の峠(ランチ・弁当)に着く。ここから急な下りとなり 30 分ほどで雪もなくなり、遥か下にテントサイトのロッジが見える。小さな湖にでる。どっと疲れがでてやっとテントサイトへ。今日は長時間歩行、雪道、急なくだりで疲れた。

ミルギン峠(4,480m)

峠越えの長いトラバース

5 月 9 日　本日は Rest。気温 5℃(5 時)。曇りのち雨のちみぞれ。

昨日は天気が続いてくれて良かった。期待したカンチェンジュンガの南面は天気が悪く見えない

5 月 10 日　出発 8:00～12:45 Tortong(トルトン、2,995m)。気温 0℃(6:00)。曇りのち小雨。

緩やかな Simbuwa 谷を下る。シャクナゲの宝庫であった。テントサイトはなくロッジに宿泊。

5 月 11 日　出発 6:40～10:30 Lasiya Bhanjyang(ラシヤ峠、3,310m)を越えた茶店(一軒家)でランチ(弁当)11:10～16:10 Yamphudin(ヤンプディン、2,080m)。気温 5℃(6:00)。曇り。

地震で崩壊した峠道を越え、1,300m を一気に下り、やっと生活臭のする村に到着。ここで佐々木さんとテンバ・シェルパとの登山・トレッキング開始から 10 周年と今回のトレッキングの主要日程な完了を祝い、ヤギ 1 頭をつぶしヤギ肉・スープを食べる。

5 月 12 日　Rest。気温 15℃(6 時)。晴のち雨。衣服を夏バージョンに替える。

5 月 13 日　出発 7:45～11:20 ランチポイント(Othan 峠を下った所)12:20～14:20 ～14:20 Khebang(ケバン、1,910m)。気温 15℃(6:00)。小雨のち晴れ。

昨夜は大雨。大きな村ケバンに到着。チベット色が消え、インド文化圏。

5 月 14 日　出発 6:25～12:30 Khandingbe(カンディンベ、約 1,000m)。気温 18℃(6:00) 曇りのち晴れ。車出発 17:00～。

出発 1 時間程で暑くなりだす。後は暑さとの戦い。村々をつなぐ道をひたすら歩く。やっとカンビンベ到着。ここでポーターを解雇。ここから車が利用できる。明日からネパール全土が交通ストライ キになるとのことで(夜は走れる､飛行機は運航) 夜間走行で飛行場のあるバドラプールまで行くことになる。チャーター車が 17:00 に到着。大雨の中、1 台の車に荷物満載、12 人を詰め込み悪路を出発。

5 月 15 日　5:30 パトラプール到着。午後カトマンズ着。

早朝、パトラプール着。昨夜のドライブは前半の悪路、窮屈な車内での仮眠と最悪であった。ここでシェルバ 1 名、コック 1 名、キッチンボーイ 3 名は夜行バスでカトマンズまで帰る｡我々は人力車で 1:30 かけて空港へ｡予約が取れず 2 便に分かれ乗機しカトマンズへ。

5 月 16～18 日　カトマンズ滞在。16 日午後、伴さんと合流。

5 月 19～20 日　カトマンズ発～ラサ乗換～成都(泊)。成都発～北京乗換～関空着(20:30)。

(参考)

・航空運賃(中国国際航空・関空～KT 往復)　　79,500 円
・トレック費用　$4,200 ×@78 + 振込手数料 400 円/1 人 = 328,000 円
・成都宿泊代(2 泊)・交通費・食費・トレッキング持込食料　≒　8,400 円/1 人
・シェルパ・ポーター等チップ代　　≒　12,000 円/1 人
・カトマンズ宿泊代　　$15/1 人　×　6 泊　≒　7,200 円

計　≒　435,000 円

静かなる山旅　　カンチェンジュンガ

ネパールを訪れるのは、今回で３回目になる。カトマンズへの飛行機の窓から白く硬く聳えるヒマラヤを眺めながら、２０数年前を思い出していた。“見るだけで登れないヒマラヤ等絶対に行きたくない”と嫌がる苑樹を説得しネパール旅行をし、その時コックピットから眺めたエベレストに感動し思わず拍手し涙が出た時の気持ちや、ポカラで遠くからアンナプルナを眺め、もっと近くで見上げたいなあと想った事を。
二回目、二年前のランタンに参加させて頂き、よく話に聞いていたランタンの山々を肌で感じ、その素晴らしさに感動し、もう一度ヒマラヤの山を歩いてみたいとの想いが強くなった。
そして今回、“もう一度ヒマラヤを近くで見たい”の想いだけで参加させて頂いたのだ。

飛行機の窓からは、カンチェンジュンガやジャヌーが手の届く近さに見え、その美しさに見とれていたのだけれど、其れが却って、あの山の傍まで一ヶ月も歩くなんて大丈夫だろうか？と言う不安になって押し寄せて来た。

けれど、歩き出したカンチェンジュンガへの道は、アップダウンが多いものの、よく整備されとても歩きやすく、山全体を彩るシャクナゲや様々な小さな花、小鳥の声、谷川の音が、飛行機で感じた不安をすっかり吹き飛ばしてくれた。
心地よい芝生のテント地、夕食にコックさんの作った美味しい日本料理を頂くと、一日の厳しかった疲れも吹っ飛び、何だかハイキングにでも来ているような感じだった。
でもやっぱりここは、ヒマラヤ、４０００ｍを超える辺りから、かなり息苦しく厳しくなってきた。
カンバチェン（４０４０ｍ）への途中、ジャヌーが真正面に見えるビューポイントがある。楽しみの一つだったけれど、あいにく雲がかかっていてジャヌーは全然見えない。
“風が強いのでひょっとすると雲が切れるかもしれない”、と言う佐々木さん福山さんの言葉で、期待を込めて暫く座り込んで待つ事にした。
空を見上げ、寒さを我慢して雲が流れるのを只じっと待つ。
同じ想いを共有し静かに過ぎてゆく時、そんな時間が幸せで、とても楽しく感じられる。
暫く待つと、雲が動き出し、雲の切れ間からジャヌーが現れた。みんなから「わあ！」と思わず声が出て、拍手。この瞬間に見たジャヌーは、一番の感動であり、迫力満点だった。
ジャヌーは、私が想像していたより存在感があった。肩を張り、羽を広げた大男が、周りの山々を抱き抱えるような恰好をして聳えている。尖った頭の部分には、目や鼻もあり、遠くの山々や空を睨み付けている様だ。そして大男のみぞおちの部分に当たる北壁は、垂直に伸び上がり誰をも寄せ付けない風情だ。
ロナク（４７９０ｍ）パンペマ（５１４０ｍ）と高度が上がるにつれ、頭が痛く吐き気がしてきた。一歩一歩毎に自分の大きな息使いが辺りに響いている感じだ。
厳しい登りだったけれども、パンペマの、カンチェンジュンガやネパールピーク、ヤルンカン等７０００，８０００ｍ級の山が、手を伸ばせば届きそうに迫ってくる姿は、それ以上の感動だ。

５月７日、グンサからジャヌーやカンチェンジュンガの裏側を行くセラ峠ルートを歩く。
一度グンサ（３４３０ｍ）から谷へ下り、セラ峠、ミルギン峠（４４８０ｍ）シネラプチャ峠（４６４６ｍ）を越えるルートで、ジャヌー南壁が正面に見える。

セラ峠手前から雪道のきつい登りが続き、ザック、ザックと雪を踏む音を聞きながら、ただひたすら登る。
ジャヌー南壁は、真っ白い大きなスフィンクスが、大空に現れた感じで、一段と風格があり、圧倒的だ。
ミルギン峠からは、カンチェンジュンガ、ジャヌー、マカルー、エベレスト等がパノラマのように眺められ、美しく感動的で、幻想的な世界が広がっていた。
けれど、ここからが大変だった。後は、下りだけだと聞いていたのに、地震で山が崩れたとかで、何度も登り下りを繰り返し、きつい日差しの中、雪の４６００ｍを、三時間以上もトラバースする事になった。
テンバ・シェルパも真剣な顔つきになり、もう一人のガイドが後ろから、「この谷を降りた」とか言っているのを聞くと、道に迷ったのでは？と内心心細かったのだが、テンバ・シェルパは確信をもって進んでいた。
このきつい登り下りが永遠に続くのではないかと思えた時は、気持ちが萎えてしまいそうになっていた。
こうして、出発してから９時間強、テント地に着いた時は、“遣り切った！”と言う感激で春子さんとテンバと三人、誰からともなく手を取り合い抱き合って喜んだ。みんな同じ想いで、歩いていたのだ。こうして、それからの下りの中でも、春子さんと「私達ってすごいね」と自分達で自分達を褒め合い、元気を出し合った日が何度かあった。
登りより下りの方が、暑さにバテ、体力を使いしんどいとは、思いもしなかった。
けれど、赤、白、黄、ピンクの大輪の花を零れる程咲かせ、延々と続くシャクナゲの林は、そんな疲れた気持ちをすっかりほぐし、忘れさせてくれた。
ここのシャクナゲの林は、ヒマラヤの中でも一番大きな林だそうだ。
そして、２５日間を通して出会った隊は、たったの１２隊、２０人程で、全てのテントサイトでも、私達だけと言う、とっても静かなカンチェンジュンガ一体を、思う存分満喫したトレッキングでした。

最後の締め括りが又ひと騒動で、ネパールが一週間乗り物ストに入る為、一日早くカンビンベからチャター車で帰る事になった。ジープが到着したのが５時過ぎ、雷雨の中、荷物満載、人満載（１２人が乗った）で疲れた皆を載せて５時半頃に出発。
一列のシートに私達４人は折り重なるように座り、真夜中のヒマラヤの稜線をひた走りに走った。
真っ暗の中故障したジープが直るのを待ちながら、「私達って、難民の密入航者みたいね」って春子さんと二人で大笑い。この状況は、兎に角笑い飛ばすしか無い。
身動きもそして一睡もできずに翌朝６時半、１２時間かかってやっと密入国者の様でパトラプールに着いた。
その後、人力車でガタガタ道を１時間半程揺られ飛行場へ。そして、ストの影響の為全員で飛行機に乗れず、二手に分かれカトマンズへ無事到着。長い長い４８時間でした。

そんなこんなも全てがカンチェンジュンガでの感動と共に、愉しく面白かった想いになっています。
心の引き出しに、宝物が一つ増えました。

佐々木さん福山さん、一ケ月の間スローペースに合わせご一緒して頂き、又とっても愉しい山旅を有難うございました。
そして、春子さん、沢山の細やかな心使いをありがとうございました。
佐々木さん、福山さん、佐々木春子さんに心から感謝致します。

苑樹　けいこ　記

マナスル・トレッキング報告(2011.10.26～11.20)

50年卒　福山昇二

10月26日

友人のTさんと二人でマナスル周回トレッキングに出かけた。

カトマンズ空港でビザを取得(30日以内、40米ドル/1人)。相変わらず長い列である。

出向えは昨年のゴーキョとカラパタール・トレッキングに同行したコック兼ガイドのデビラムとトレッキングの手配を依頼したテンバ・シェルパの奥さん。テンバは市大ＯＢ隊のランタン山群、グルカリポリ登山隊のシェルパとして登山中である。

ホテルはいつものチベットゲストハウス。今回は30米ドル/1ルーム・ツインで本館のいい部屋にしてもらった。夕食はいつものロータスで日本風のカレー。

10月27日　晴れ

起床4;00　ホテル発4:50

カトマンズから長距離バスでゴルカを過ぎてアルガット・バザールまで行くことになる。当初はゴルカから歩くことを考えていたので2日短縮することになる。

カトマンズのバス停発6:10～15:00アルガット・バザール(Arughat Bazar 608m)

バスは超満員。6時間位と聞いていたが、途中、対向車とのすれ違い、パンク修理、ゴルカから先の悪路などで結局9時間かかった。

アルガットの最近建ったらしいホテルの庭にテント設営。いよいよトレッキング開始。

10月28日　曇りのち晴れ

起床5:30～出発7:40～10:40アルケット(Arket)12:10～13:40ソティ・コーラ(Soti Khola 700m)

車道をブルガンダキ川沿いに歩く。アルケットで昼食。村も祭らしく茶店のバァーさんに首飾りをもらう。奥に白い山(スリンギヒマール?)が見える。のんびりした気分である。ソティの小さな村のテント場で泊まる。村の手前で川の支流から流れ落ちる100m以上はある大きな滝があった。

夕方、祭で村々を踊りながら歩いているグループが無理矢理、踊りを披露しだし、50ルピー渡す羽目になる。

我々のトレッキング隊の構成は、シェルパ2人、コック兼ガイド1人、キッチンボーイ1人、ポーター6人(内3人は炊事の手伝いもする)の10人と我々2人。途中、短期間2名のポーターを雇う。

10月29日　朝方霧のち曇りのち晴れ

起床5:15、出発7:15～10:15昼食(Lapubesi)12:40～15:00ﾏﾁｬｺｰﾗ(Machhakhola 860m)

昨夜、シェルパとポーター達は祭で村に踊りに出かけたらしい。

いよいよ道はトレッキング道らしくなり、崖に沿った道、河原に下りた道と登り下りするが標高はあまり高くならない。広い河原には茶店もあった。乾季のみの営業だろう。行きかうトレッカーは少ないが、村人とはよくすれ違う。道は生活道路である。マチェコーレ着。ここは数軒の宿泊ロッジがあり、トイレのあるテント場でテント設営。

10月30日

起床5:30、出発7:20～10:45昼食(Dobhan ドブハン 1,070m)12:30～15:50(JAGAT 1,340m)

出発してしばらくのタトパニで温泉があり頭を洗う。気持ち良かった。道は谷沿いに進み急な石積

みの階段が多くなる。対岸に大きな滝が流れていた。

谷沿いに登り下りしながらジャガットへ。この村に入ると石畳がきれいに敷き詰められ、荷役のロバ、馬の糞も掃除してある。この中のテント場のあるロッジにテント設営。

10 月 31 日　朝方小雨のち曇りのち小雨

起床 5:00、出発 7:00～10:40 昼食(エクレバッティ、Ekle Bhatti 1,600m)12:10～14:50 ペワ(Pawa 2,000m?)

昨夜から明け方にかけて小雨。村はずれにチェックポストあり。途中のピリム(Philin)に日本人が建てたという大きな学校があった。歩きやすい谷沿いの道を登り下りし、古い木の橋を渡りペワへ。ここは狭くなった谷にへばりつくようにロッジがあり、狭いテント場に設営。昨日からの雨はラルケ・パス(峠)では雪かな。

狭い谷道で荷を運ぶロバ

大きな滝

11 月 1 日　晴れ

起床 5:30、出発 7:20～10:40 昼食(ビヒペディ Bihiphedi 1,990m)12:30～14:30 ガップ(Ghap 2,380m)

相変わらず谷沿いの道を登り下り。途中、水車小屋があった。谷が開けた村、ガップでテント設営。ロバで荷を運んでいる大人数の外国隊は下のテント場。風が冷たくなってきた。

11 月 2 日　晴れ　6 時 30 分 気温 8 ℃

起床 5:30、出発 7:20～11:25 昼食(リヒ LiHi 2,920m)13:15～15:10 ロー(Lho 3,180m)

だんだん天気が良くなってきた。テント場後方にガネッシュ山群の山々が見える。歩き始めて右手奥に 6 千 m 程の山が見える。リヒまで登りが続く。麦畑の村々を歩く。田圃はなくなった。高度が上がり寒くなってきた。

11 月 3 日　霧　気温 5℃(6 時 30 分)

起床 5:30、出発 7:20～10:45 サマゴーン(Samagaon 3,520m)泊

村はずれのゴンパからマナスルが見える。1 ビッチ手前でナディチュリ(P29)が見える。すばらしい景気だ。シャラ(Shayala 3,500m)で右からナイケピーク、マナスル(8,163m)、P29(7,871)、ヒマルチュリノース、ヒマルチュリ(7,893)が見える。マナスル、P29、ヒマルチュリはマナスル三山と言われ、日本隊が初登攀した山である。マナスルには雲がかかり全容が見えない。

サマ(Sama(Ryo))の村は平らな台地で大きな村である。その上のサマゴーンで宿泊。

11 月 4 日　曇り、山は霧　気温 3℃(6 時 30 分)

起床 5:45、出発 7:10～10:30 昼食(4,350m 地点)11:10～11:45 引き返し地点(4,600m)～14:15 テント

今日は高度順化を兼ねて、マナスルのベースキャンプまで行くことにする。マナスル氷河の右側の尾根をどんどん登る。生憎、天気が悪い。そのうち晴れることを期待して登り続けるがガスはとれない。氷河の末端まできても山は霧の中である。ガスは晴れないがもう少し行こうということで、結局、4,600m 地点で引き返す。BC 地点まであと 1 時間はかかると同行のシェルパ・ラデューが言っていた。地図上のBC地点は4,400m付近となっているが、現在は温暖化で氷河が後退しているのかもしれない。

ヒマルチュリ(7,893m)

マナスル(8,163m)

11 月 5 日　朝方ガス、のち曇り　気温 3℃(6 時)

起床 5:30、出発 7:30～10:10 サンドゥー(Samdo 3,860m)泊

天気が相変わらず悪い。ちらほら雪が降ってくる。開けた谷を最奥の村、サンドゥーに到着。ここで高度順化と天気待ち、日程調整のため 2 泊することにする。

11 月 6 日　曇り　気温-1℃(6 時)

午前中、裏山ハイキングをする。

11 月 7 日　晴れ　気温-3℃(6 時)

起床 5:50、出発 7:20～10:40 ダラムサラ(Dharamsala 4,460m)泊

今日は待望の晴れである。後方、右手に白い大きな山が見える。ヒマルチュリか?。しばらくで河は二つに分かれ、ラルキャ峠は左側の谷をつめる。右はチベット越えの道となる。進むにつれて正面にラルキャピーク(6,249m)、左に大きなマナスル、氷河も見える。だんだん高度があがり、呼吸しにくくなり、少し頭も痛い。ダラムサラには定住村はなく、峠越えのトレッカーのテント場と炊事小屋、数軒のロッジがある広々とした所であった。

11 月 8 日　晴れ　気温-3℃(3 時)

起床 2:00、出発 3:30～8:40 ラルキャ峠(Larkya La 5.160m)9:00～12:00 昼食(急な尾根の末端)12:30～14:30 ビンタム(Bimthan 3,890m)

今日はいよいよ峠越えである。ヘッドランプを付けて出発。道は明瞭で歩きやすいが峠までは長い。小丘を越えれば峠かと思うがまた丘がでてくる。やがて雪道となりやっと峠へ。高度の影響で体が重い。峠は広々としており、右手に三角形のネムジュンが真近に見える。遠くに見えるのはアンナプルナⅡかな。下りはしばらく平坦な道を歩き、急にきついくだりとなる。すべりやすい砂利道で所々凍っており歩きにくい。急な尾根を下りきって平らなモレーンの川原に着いて大休止。おにぎり、ゆで卵等の昼食を取る。疲れた。このあとテント地まで 2 時間の歩きは長かった。ビムタムは広々とした台地でマナスル北面の絶好の展望地であった。

ラルキャ峠(Larkya Lo 5,160m)

ネムジュン(Nemjung 7,140m)

11 月 9 日　晴れ　気温 0℃(7 時)　　起床 7:00

今日は昨日の疲れと日程に余裕のあることから休養とする。南方、目の前に大きなマナスル、後方、北に三角形のネムジュン、尖ったピークのティリジェに囲まれ、ビムタンは別天地である。モレーンの丘に上がり、写真を取ったり、本を読んで過ごす。

北西面から見たマナスル

ネムジュン

テリジェピーク(Tilji Peak 6,532m)

小丘から見たビンタムの宿泊地

11 月 10 日　晴れ　気温 0℃(6 時 30 分)

起床 6:00、出発 8:20～12:30 カルチェ(Kharche 2,700m)

別天地ビムタムとお別れ。歩き始めて後ろを振り返る。マナスル、マナスルノースが見える。雪の山とはこれでお別れである。四方の氷河からの水を集めた Dush Khola(河)をどんどん下り、新しく建

ったカルチェのロッジに泊まる。ここはテント場が狭いので、初めてロッジの部屋に泊まる。急に暑くなり、下着をＴシャツに替える。荷物整理。

プンギ　(Phungi 6,528m)

マナスルノース　(Manaslu North 7,157m)

11 月 11 日　晴れ　気温 4℃(7 時 20 分)

起床 6:20、出発 7:35～12:05 ダラパニ(Dharapan 1,963m)

ゴア、学校のあるティリジェの村を過ぎてマナスルとアンナプルナ一周トレッキングの分岐店である大きな村ダラパニに着く。ここからマルシャンディ・コーラ(河)となる。

日程に余裕があるので、昨日から行動は午前中だけにしてゆっくり進む。

11 月 12 日　曇り時々霧　気温 11℃(7 時)

起床 6:00、出発 7:30～11:20 昼食(サタレ、Sattale 1,680m)12:30～14:10 ジャガット (JaGat 1,300m)

広い河原にある大きな村タル(Tal)を過ぎる。大きなロッジ、ガラス窓のある家が目立つ。かなり裕福そうな村である。トレッカーも多いのであろう。この村を過ぎると谷が狭まり岩道となる。途中のサタレで昼食を取り、さらに岩道を下るとチャムチェ(Chyamche)に着く。現在、ここまでジィープが入るらしい。ダラパニの先のマナンまで車道を整備するらしくサタレでは対岸の岩壁に道を造る工事を行っていた。ほとんど人力であるのでいつまでかかるのかな。

11 月 13 日　霧、曇りのち小雨

起床 6:00、出発 7:45～9:50 ゲルム(Ghermu 1,130m)

相変わらず天気が悪い。マルシャンディー河を下る。だんだん町に近づく感じ。久しぶりに頭を洗う。

11 月 14 日　霧、小雨のち曇り　　気温 19℃(11 時 30 分)

起床 6:10、出発 7:30～10:50 ナディ(Nadi Bazar 930m)～14:00 ブレブレ(Bhulbhule)

14:10～(乗合バス)～15:15 ベシサハール(BESI SAHAR)

今日も天気が悪い。ブレブレから乗合バスに乗り、大きな町ベシサハールへ。これでトレッキン終了。ロッジの裏庭に最後のテントを設営。今日はニワトリをつぶし、ビールを飲んで乾杯。

6 時頃、カトマンズからランタン山群のグルカリポリ隊に同行していたシェルパのテンバがチャーター車で到着。明日はこの車でカトマンズまで帰ることになる。

11 月 15 日　曇り

起床 6:00、出発 7:30～10:30 昼食 11:00～14:00 カトマンズ

11 月 16 日～18 日

カトマンズ滞在。市内観光などして過ごす。

11 月 19 日　曇り

カトマンズ発

11 月 20 日　曇り

バンコク乗換で早朝、関空着。　　以　　上

追記

トレッキング費用（1 人 ）　　約 405,000 円

・航空券(往復)　　140,010 円

・トレック代金(エージェント支払い)　2,800 米ドル = 226,870 円

・カトマンズ滞在費等　　38,000 円

宿泊費(5 泊)　15 ドル×5 = 75 米ドル

ビザ代　　40 ドル

食事・観光費用　　9,000 ルピー

チップ代　　(200 米ドル(シェルパ 2 人) + 9,000 ルピー(ポーター6 人)

+ 10,000 円(コック 1 人))÷2 ≒ 18,000 円

*1 ルピー≒1 円

夏（６月）の富士山　　片岡　泰彦

６月１日夜、御殿場駅で大阪から来る田中Ｄｒ（５６年卒）をピックアップし定宿の水ヶ塚公園でビールで乾杯。
２日朝、富士宮口５合目から暫く登ると梅雨入り間近なのにもう雪を踏む。思ったより雪が多い。只管雪田に付けられたトレースを辿り、9.5 合からの急な雪面を上りきると、そこには浅間神社の屋根だけが見えていた。本殿は雪の中で、冬でもこんなに雪はない。剣が峰までの道も真っ白で、快適に歩ける。日本最高地点の石碑も７割がた雪に埋もれ、日本までしか見えない。
神社の屋根前でスキーを履き、二礼二拍手一拝して滑降開始。時々深い霧に包まれるので離れないように滑る。スキーを外して１５分ほど歩いたらもう６合目だった。雪の多さに満足、満足。

６月３日　富士の裾野は広いので、富士宮口から御殿場道に回りこむ新ルートを滑る計画。天気は悪くガスの中を歩く。宝永山火口付近の道は、軽石が堆積し蟻地獄のように足元が崩れて疲れる道だ。雨がポチポチ降ってきたかと思うと、横風強く、雨も斜めに弾けるようになる。富士権現の気まぐれで気象が急変する。こんな日は登らないのに限る。踵を返すのが早いのも山岳部。麓の御胎内温泉に午前中から浸かる。富士見の露天風呂からは一面の黒い雲に覆われた富士山方面が見えるばかり。雨に打たれながら、極楽、極楽。

６月１０日　満足と極楽を求め再度足を運んだ。自宅を４：３０に出たら、２時間後には、５合目を出発できた。多くの登山者、ボーダーが頂上を目指すが御殿場ルートには誰もいない。喧騒はなく静寂そのもの。８合目を過ぎると通常の登山道は長田尾根を越えるが僕はそのままガレ場を直登して雪田を上ることにした。お鉢の道まで標高差８０ｍを残して雪がつまったので、板に履き替える。先ほどからガスが湧いてきており、次第に上にあがっている。誰も居ない大斜面は快適だが、寂しい。霧の中で体が浮くようになり、方向の感覚がなくなってきた。こんなときにホイホイ滑り降りてしまうと、雪田から雪田への繋がりを誤りとんでもない場所にでてしまう。残念ながら雪は続いているがスキーを担いで、夏道を外さないように慎重に下った。６合目から本格的な雨となった。昨日気象庁が関東地方に梅雨入り宣言をしたばかりで、初期の降水予想は概ねあたる。
来シーズンも良い雪と遊べるように祈念しながら、スキーを仕舞う。季節は夏から夏へ、梅雨が明けたら夏山本番。六根清浄、お山は晴天。

総会が開催されました！

2012 年 4 月 14 日

於 ： 大阪弥生会館

今年も 32 名(会員 27 名、賛助会員 5 名)の出席の下、総会が開催されました。山田幹事長の総括報告、兵頭幹事の昨年度活動報告及び今年度活動予定や中嶋幹事の「ヒュッテ雪線」関係報告、上田幹事の会計報告等がなされました(会計報告については、別紙を参照ください)。

また、役員人事については、廣谷会長が顧問となり、新会長に小笹孝氏が就任し、会報担当幹事が奥田さんから澤井さん、企画運営幹事に尾形さん、山岳部指導幹事に和田さんが加わり、他は留任となりました。

小笹新会長は就任の挨拶で歴史のある市大山岳会存続の根幹である山岳部員の加入に力をいれたい等と述べられました。

その後、今春の伴、和田さんによるランタンプロジェクト・シャルバチュム登山について伴さんから計画概要の説明がありました。

総会に引き続いての記念講演は、元大阪市立大学理学部教授・北大山岳部 OB の吉田勝氏に「地球科学の進歩における大学山岳部の役割」と題して、大学山岳部出身者が地質学などの野外科学における開拓的研究を進めるために必要な資質があることを実際の調査事例を紹介しながら話していただきました。

記念講演の後は懇親会となり、楽しいひとときを過ごして散会いたしました。

*講演者の吉田勝先生と後藤昌行さんのご子息・後藤皓二郎さんが今年度から賛助会員になられました。

新任ご挨拶

大阪市立大学山岳会会長
小笹　孝

四月の総会におきまして廣谷前会長の後をお受けいたしました小笹孝でございます。
さしたる山暦も無く、外に通用する顔どころか内向きにすら何の貢献も無いままにかかる重責は実に身に過ぎる大役でございますが、諸先輩のご指導を仰ぎながら会員皆様のご協力を賜りますとともに幹事諸兄には更なるボランティア精神を発動していただきまして，皆様のお陰を蒙りまして職責を果たすべく、浅学菲才をも省みず努力するつもりでございます。何卒よろしくお願い申し上げます。

今年の連休には白馬、穂高、鹿島槍で８名もの疲労凍死にいたる遭難がありました。
彼らはみな共に中高年者であり、登山を中高年になってから初めてお始めになった方々とお見受けいたしますが、登山に必要な基礎知識や山で生活時技術を含めての基礎技術に欠けるところが多々あったかに新聞報道等で感じていました。
我々市大山岳会員は市大山岳部で基礎知識や基礎技術を植え込まれ、お蔭様で山では簡単に死なない様な下地を育てて頂きました。

我々には大恩ある山岳部が部員数の低迷で満足な活動を続けていない状態が長年続いている事態はご高承の通りであります。
兎にも角にもかかる事態を改善するには部員数の増加に繋がる対策が喫緊の問題です。
合格者発表や入学式を通じて幹事諸兄の勤労奉仕の下、過去数年にわたり部員勧誘運動が続けられてまいりまして部室確保は辛うじて達成できた経緯も有りましたが、数の増加に繋がっていません。

全体的な傾向として過去の有名山岳部も部員数の減少問題を抱えてますが、全ての大学山岳部が衰弱しきってるわけではないと思います。

部員確保に成功している事例を参考にするべく実態把握に一層努めると共に、勧誘方法を根本的に再検討して、山小屋・雪線の利用による部員獲得策をより一層柔軟に考えて施策を考え出してゆきたいと思います。

また、登山行為自体がパイオニアワークに繋がってた時代には学生達若者を登山に惹きつける魅力が自ずとありましたが、いまや登山行為自体にはパイオニアワークに繋がるものは皆無かと思います。

若者すなわち学生には登山にも名目が必要になってきていると思います。

我々も山登りと平行してその何かを謳い込んでの募集活動が必要かと思います。

日本山岳会も法人格が従来の社団法人から一般社団法人か或いは公益社団法人かの２社択一を迫られた法制度の変革を機に公益法人を選ぶと同時に、公益目的事業の一つに登山活動を通じての障害者支援活動を掲げ、茨城支部が自閉症協会の登山支援、宮崎支部が家裁少年委託登山、東海支部が視覚障害者支援登山などを実施すると言う外、山岳環境保全活動の一環としての各地の森造り事業への協力がうたわれています。

会員皆様の御協力を切にお願いする次第でございます。

大阪市立大学山岳会役員人事

（平成２４年度）

会長	小笹　孝	
名誉顧問	池永　薫治	
副会長	伴　　明	佐々木　惣四郎
顧問	川勝　弘一	廣谷　光一郎
幹事長	山田　裕敏	
監査役	廣瀬　秀雄	
幹事	福山　昇二	
	兵頭　渉　（ＩＴ担当）	
	藤村　達夫（事務局）	
	澤井　弘忠（会報担当）	
企画運営幹事	上堂　竹壽	
	丸子　隆志	
	兵頭　渉（兼任）	
	澤井　弘忠	
	島川　勝（山岳部長兼任）	
	尾形　達也	
会計幹事	上田　忠士	
山岳部指導幹事	佐々木　惣四郎	
	兵頭　渉（兼任）	
	和田　城志	
	武部　秀夫	
山岳部長	島川　勝	
東京支部長	片岡　泰彦	
ヒュッテ運営幹事	中嶋　信正	
	兵頭　渉	
	大島　一恭	

以上

24年度総会案内返信欄より

〇相変わらずの米国在住、欠席申訳なし。Eメールで各位のご活躍を知り、力強く感じています。池永、田倉、廣谷各氏にヨロシク(昭28年卒　内藤一毅)。

〇4月14～15日と鹿児島に行かなければならなくなりました。次男の結婚のためです。皆さんによろしくお伝えください。せっかくの壮行会ですが。
(昭50年卒　和田城志)

〇同窓会と重なった為、欠席させて頂きはます。皆様によろしく。
(賛助会員　長井節子)

〇盛会を祈念します。藤本様、九州に引越しされるとか、お会い出来なくて残念です。奥様によろしく(昭41年卒　丸子隆志)

〇今年度は身体をいため山にスキーに行けませんでした(賛助会員　柴原勝)。

〇所用があり欠席します。5歳余の孫と近くの山、高尾山や景信山にいよいよ行けるようになり、楽しみが一つ増えました。三月十四日、スペインから戻りました。キリスト、イスラムの文化が混ざり、中世の城・宮殿が残る面白いところです。バルで飲むと安いので安心して飲めます(昭33年卒　堺晧二)

〇帰省日時未定の為、欠席。日程合えばドタ出席します。今シーズンは連日の除雪に雪がキライになり、スキーは1日もせず(昭45年卒　大島一恭)。

〇当日、所用ができましたので欠席です。伴さん、和田さん成功を祈ります。山田さん､90周年誌お世話になりました｡楽しみです(昭47年卒　澤田宗博)。

〇当日、病院主催の講演会があり、そちらに出席しなければなりません。申訳ありません(昭56年卒　田中博之)。

〇谷口清士は昨年11月23日に永眠いたしました。母が体調不良のため娘がご報告させていただきます。今まで大変お世話になりありがとうございました。皆様方もお身体どうぞご自愛下さいませ。

〇漸く卒業しました。今年は引き続き大阪市大に滞在します。山登りの再会にはもう少し時間がかかりそうです(平成24年卒　原田剛)。

〇幹事役ご苦労様です。当方、いまだ現役(倒れるまで?)で頑張っております(主としてマンションリフォーム業)。又、土曜日は中国語塾を開催しており、ご案内の出席は無理ですのでよろしくお願いします。皆様で楽しくやって下さい。
(昭36年卒　久保田淳三)

〇兄妹の一人が当日の法事に来てくれるよう頼まれていますので欠席致します。近頃は愛宕山なら一日仕事になり、東山大文字山(466m)、西山小塩山(642m)位の半日ブラブラが主体となりました。加齢とはいえ情けない限りです。
(昭30年卒　高木健次)

〇入院中です(昭32年卒　林日出雄)。

〇サルバチュム登山隊の成功をお祈りします(昭 33 年卒　門田嘉弘)。
〇今年の総会失礼します。仕事が 14 日さけられないようになりました。伴さん和田さん、サルバチユム登ってください(昭 54 年卒　武部秀夫)
〇加藤文太郎、植村直巳を生んだ但馬(兵庫北部)の再興はなかなかですが、若者に期待したいです。目の手術して欠席です。皆さんお元気に!!
(昭和 41 年卒　大森昌也)
〇仕事が忙しく欠席させていただきます。昨年、娘が誕生し、今は家族 3 人で慎ましく暮らしています(平 20 年卒　澤真平)。
〇毎週のように外岩に行ってますが知っている人と誰もあいません。
(平 20 年卒　藤井陽介)
〇脳梗塞後遺症の呆けです。山へ行けないのが残念(昭 30 年卒　山本勝)。
〇健康第一の生活を心掛けています。手足はよく使いますが頭を使うことが少なくなりました(昭 34 年卒　中西雅一)
〇吉田勝先生は、小生が JICA のシニアボランティアでネパールに滞在していた時に同じシニアボランティアとして 1 年後にトリブヴァン大学で教えておられた方だと思います(昭 33 年卒　北濃祥二)。
〇4 月 21 日に九州に引越します。来年からは出席が困難になると思います。
(昭 34 年卒　藤本勇)
〇お世話になります。山に登らない私にとって山岳会のお誘いにいつも二の足を踏んでしまいますがいつまでも昌行さんの事を思って下さる皆様にお会い出来るのは楽しみなことです(賛助会員　後藤葉子)。
*総会当日はご子息の後藤皓二郎さんが出席されました。

「会員の訃報通知」
上記「総会案内の返信」の通り、谷口清士氏(昭和 27 年卒)が昨年 11 月 23 日に逝去されました。遅ればせながらご冥福をお祈り申し上げます。

2011年度活動報告

実施月	行　き　先　等	参　加　者
1/15	冬富士	伴、兵頭
1/19	東京支部　新年会	広谷、川勝、山本、他
1/23	新春登山・六甲	島川、上田、他
2/5	新年会　（ 大阪）	川勝、上堂、小笹、他12名
3/22	チョ モランマ壮行会	藤本夫妻
	会友　林さんのチョ モランマ登山隊壮行会	
4/15～4/17	スノ ーハイキング（ 梶池・ 八方）	山田、兵頭
	霙の天狗原、快晴の八方・ 唐松	
4/27～5/11	アンナプルナト レッキング	福山、他2 名
	BCから の8000m峰の眺望は素晴らしい。	
5/3～5/5	鹿島槍・ 東尾根	伴、山田、兵頭
	雪稜を辿り 北峰、本沢を下降	
6/17～7/18	アイスランドト レッキング	佐々木夫妻
	全行程テント 泊、自炊の旅	
7/9	六甲山岳部新人歓迎ハイキング	大山（ 新人）、島川、他
7/16～7/18	駒ヶ 根山荘　　草刈・ 外壁塗装	雪線運営委員会協賛
	囲碁	
7/20～8/4	ド ロミ テ、サンモリッツト レッキング	上田夫妻
	南チロルの雰囲気を 楽しんだ	
8/17～8/22	剣・ 立山（ 現役夏山合宿）	大山（ 現役）、佐々木
	連日の雨で剣・ 未登頂、長次郎雪渓登降、立山登頂。	
8/7～8/20	スイスアルプス・ シュレックホルン	山田
	4078mの絶頂、辻村伊助と震災と	
9/25	珍しい肴で飲む会	小林、小笹、他10名
	「 定年悠々」（ 小林深著）出版記念	
10/9～10/10	桂木場～木曽駒ヶ 岳往復	福山、松本（ 現役）
10/3～11/7	グルカルボ・ リ（ ランタンヒマール）	伴、佐々木、兵頭
	最高到達点5627mまで、24時間の降雪で雪面不安定。	
11/3～11/5	駒ヶ 根ゴルフ・ 囲碁会	廣谷会長、他
	（ 兼山荘清掃）	
12/2	創立90周年祝賀会	来賓、会員、賛助会員　60余名
2/19	伊吹山スキー登山	上田、田中、他2名

小笹スキー・ スクール

12・ １・ 3月	於　夕張	大堀教頭、恒例メンバー
１・ ２ 月	於　梶池	兵頭、恒例メンバー

大阪市立大學山岳会　会計報告（2011年度）

期間　2011/3/1～2012/2/29

2012/4/14
会計担当　上田　忠士

収 入 の 部

収 入 内 容	金　額	備　考
前年度繰越金	1,219,690	
会費（正、賛助会員）	399,000	
90周年party 残金	142,250	福山さんより一時預かり　開催12/2
総会会費	155,000	総会開催4/4。 出席33名（会員26、賛助会員3、ゲスト4
利息	317	2回
年度内収入　＊	696,567	
合　計	1,916,257	

支 出 の 部

支 出 内 容	金　額	備　考
総会費	194,430	開催4/4
講演講師謝礼	20,000	和田城志さん
山岳会会報発行費	78,718	2回発行（6月、12月）
現役保険	5,000	佐々木
外部団体会費他	15,000	JAC, JAC関西支部
90周年記念関連	36,794	写真パネル作成、案内など
事務費	23,950	総会案内ほか
年度内支出　＊	374,592	
次年度繰越金	1,541,665	
合　計	1,916,257	

年度内収入	696,567	
年度内支出	374,592	
収 支 計	321,975	増 分

預金先　　ゆうちょ銀行　　口座名：大阪市立大学山岳会
記　号：14020
番　号：38156801
2/28　現在残高 1,541,665

上記報告内容は正しいものであることを認めます。
監査　　廣瀬　秀雄

2012年度活動予定

実施月	行　き　先　等	参　加　者
４ 月・ ５ 月	近郊登山　　関西・ 関東夫々	都度案内
４ 月	ネパールト レッキング	佐々木夫妻、苑樹、福山
4/22～6/7	ランタンヒ マラヤ/シャルバチュム登山	伴、和田
	シャルバチュム6981m、キュンカ・ リ 西面偵察	
７ 月	駒ケ 根山荘　草刈	雪線運営委員会協賛
	外壁塗装	
	囲碁・ ゴルフ会	
８ 月	夏山合宿	現役山行に　follow
１１ 月	駒ヶ 根ゴルフ・ 囲碁会	恒例メンバー
	（ 兼山荘清掃）	
１２ 月	年末　富士山行	伴、兵頭

小笹スキー・ スクール

１・ ２・ ３ 月	於　夕張	恒例メンバー
１・ ２・ ３ 月	於　梶池	恒例メンバー

大阪市立大學山岳会　ヒュッテ雪線 会計報告書　2011年度

2012年4月14日
（2011年3月1日～2012年2月29日）　会計：上田忠士

収入の部	金　額	備　考	支出の部	金　額	備　考
前年度繰り越し	1,417,742		電気料金	31,499	前年比　92%
利用料	124,500	前年比　40%	ガス料金	25,812	前年比　79%
利息	304		水道料金	37,800	固定料金
			固定資産税	42,500	
			地代	51,277	
年度収入　計	124,804		汲み取り代	7,750	1回
			機械レンタル料	31,080	兵頭
			住民税	4,500	
			暖房軽油	13,626	山田,中嶋
			備品、メンテ用品他	15,885	中嶋、奥田他
			年度支出　計	261,729	
			繰り越し金	1,280,817	
合　計	1,542,546		合　計	1,542,546	

収 入　　124,804
支 出　　261,729

預金残高　　2月29日現在
八十二銀行　　559,603（東京営業部　611-134198）
ゆうちょ銀行　　721,214（記号：12110　番号：81277851）
合 計　　1,280,817

監 査　　廣瀬　秀雄

利用料推移	金　額	
2,007	355,500	
2,008	258,000	
2,009	199,200	
2,010	329,000	
2,011	124,500	

雪　線　関　係　　Ｈ．２４．４．１４

１．平成２３年度報告

①　菅の台別荘地区、下水道整備計画の進捗（兵頭）

本年度は別荘地内、山側道路部の本管工事が開始された。雪線付近の本管工事は平成２６年度竣工予定で、２７年度以降　各戸から本管への繋ぎ込み工事が実施可能となる。

尚、受益者負担金（予定では３２０千円／戸）は課徴されない様子。

②建屋外壁補修塗装（７月行事時）

計画していた建屋外壁の補修塗装（水膨れ状剥離箇所及び周辺部塗膜の除去と再塗装）を行った。特に懸案となっていた　日射に依る劣化の激しい建屋南面の高所や軒下も、天候にも恵まれて　高所作業車を駆使して　全て会員の手で　全面再塗装を完了した。

作業にご協力頂いた皆様　特技を発揮頂いた皆様　本当に有難うございました。

③　７月行事（７月１６日～１９日）

上記建屋外壁補修塗装工事、敷地内草刈作業、外階段の再塗装、２Ｆ天井梁部の黒カビ除去と通気口フィルター清掃、山行（空木岳、往復９時間、２名）、ＧＯＬＦ（４名）

④　１１月行事（１１月３日～５日）

清掃、焼却、ＧＯＬＦ（１０名）、囲碁、カバー洗濯等・備品手入れ、

⑤　水道配管のチェック

正月に台所水道蛇口が凍結。配管系全てをＢＥＳＳにてチェック。異常無し。

⑥　京大「笹ヶ峰ヒュッテ」ヒアリング

雪線の今後の運営の参考にすべく、現状のヒアリングを行った。

利用対象者の規模、法人化された大学の所有物である事、利用方法、等　雪線とはかなり状況は異なっているが、互いに利用し合い　交流を深めるべく　考慮中。

２．平成２４年度計画

①　昨年度建屋内外について　かなり労力を掛けて手入れしてきたので、今年度は補修計画は特に無い。但し　利用者の方々から頂いた情報を基に　必要なメンテナンスは行う予定。

②　下水道整備計画については当面工事の進捗を見守り、（市）からの情報収集に努める。

③　薪ストーブ燃料の今年度分は確保済。次年度以降の入手先の具体化検討。

④　７月行事計画

７月２８日（土）　集合・草刈作業

２９日（日）　山行・囲碁

３０日（月）　ＧＯＬＦ　、解散

⑤　１１月行事計画

１１月１日（木）　集合・焼却、清掃作業

２日（金）ＧＯＬＦ（伊那国際ゴルフクラブ）、囲碁

３日（土）　山行、

４日（日）　山行、解散　　（以上）

書籍の寄贈について

奥田　寛

（１）藤本　勇氏（昭和３４年卒）より、今春の九州転居を機に、蔵書３６冊を「ヒュッテ雪線」蔵置向けに寄贈して頂きました。

＜寄贈図書一覧＞

－「カンペンチン」（京都大学学士山岳会）、「関西登行会５０年史　1997」、
「ダウラギリ主峰登頂報告書１９７０」（同志社大学山岳会）、
「天山山脈　トムール峰１９８６年夏」（女子登攀クラブ）、
「俺って一体何だったのか」（佐藤耕三追悼集）、「ナムナニ峰」（関西大学山岳部）
「Ｐｋ６８８５事故報告書　徳田仁君追悼」（大阪歯科大学牧稜山岳会）、
「山嶽寮　甲南山岳部創立７５周年記念号」（甲南山岳部・山岳会）、
「明治大学マナスル・アンナプルナ１峰登山隊１９９７」

－「山と探検」（今西錦司）、「ヒマラヤの高峰４」＆「ヒマラヤの高峰５」（雪華社刊）、
「キャンプ・シックス」（ＦＳ・スマイス）、「カンチェンジュンガその成功の記録」
「Ｋ２登頂」（アルディート・デジオ）、「屏風岩登攀記」（石岡繁雄）、
「わが山々へ　」（ワルテル・ボナッティ）、「アルプス記」（松方三郎）、
「日本山岳名著全集　５」（あかね書房刊）、「森林・草原・氷河」（加藤泰安）、
「廊下と窓」（冠松次郎）、「ヒマラヤ行」（鹿子木　員信）、
「屋上登攀者」（藤木九三）、「冒険　この駆りたてるもの」（Ｗ・ノイス）、
「ガネッシュの蒼い氷」（京都大学山岳部）、「パタゴニア探検記」（高木正孝）

－「ドルポ　ネパールヒマラヤ最奥の聖地」（大谷映芳）、
「To Kiss High Heaven ～Nanda Devi」（J.J.Languepin）、
「ジャヌーへのたたかい」（ジャン・フランコ、リオネル・テレイ）、
「初登頂　花嫁の峰から天帝の峰へ」（平井一正）、「Climbing the Fish's Tail」
（Wilfrid Noyce）、「対談集　今西寿雄と語る」（日本山岳会関西支部）、
「ミニヤコンカ初登頂」（バードソル他）、
「ヒドンピーク初登頂」（ニコラス・クリンチ）、
「ダウラギリに魅せられた男　追悼小松幸三　小松幸三追悼集」（銀河書房刊）、
「The Himalayan Journal　５５」

＊ご寄贈頂いた書籍は、「ヒュッテ雪線」の２階書棚に蔵置しました。

（２）阪神淡路大震災で被災された森本氏宅から当山岳会へ寄贈頂いた蔵書を皮切りに、これ迄の先輩諸氏等の寄贈により、「ヒュッテ雪線」の本棚（１Ｆ：当初設置、２Ｆ：上堂氏の追加製作）は満杯となりました。有難うございました。

2013 年春の候補（ドルジェラクパ　2012 年 5 月　和田氏撮影）

編集後記

バタバタの編集でありました。実質山田幹事長と　兵頭委員におんぶ抱っこの状態でした。ご協力ありがとうございました。要領も少し分かり次回からはもう少しできるかもしれません。パソコンの使い方が良く分からなく前任の奥田さんの苦労もよく理解できました。原稿の早めの依頼と締め切りは必須です。皆様のご協力を切にお願いします。

先週（六月十六日）富士山にいってきました。すごい暴風雨で最新の雨具（タラスブリバ）もまったく役に立たず惨めな思いで２９００ｍから下山しました。雨用の手袋も他のメンバーは持っていたのにうかつでした。七月にも再度挑戦です。初めてのランタン谷十月のナヤカンガを目指して。

澤井　弘忠